

## Aoyama Sapience

第41号



青山学院大学 文学部 英米文学科同窓会 会報

2019年7月15日発行

## ■ 巻頭随想 ■

回想——1950年代のアメリカ留学  
古賀 節子

私が青山学院大学文学部英米文学科に入学したのは、1950年です。その前年、敗戦後の学制改革により、本学は新制大学として、文学部(基督教学科・英米文学科・教育学科(1950年増設)・商学部・工学部(翌年関東学院大学に合同))で発足しました。校舎は、現在の1、2号館と正門入ってすぐ左側の大教室と現在のガウチャーホール記念礼拝堂の処に屋根がかまぼこ形の講堂だけでした。

在学中は、スタインベック、フィッツジェラルド、フロスト、メルヴィル等、米国文学を多く学びました。当時、間島記念館が大学図書館として使われ、書架で自由に本が選べる仕組みはなく、係の人が本を書庫から持って来るのをカウンターで、じっと待たなければなりません。そんな中、現在の日比谷の宝塚劇場の近くに、これまで見たことのないセヴンティーン、ヴォーグをはじめ色鮮やかな各種雑誌が陳列され、本も自由に手にとれる明るい開放的な図書館が、連合国軍総司令部(GHQ)によって開設され、「これが図書館だ」と想わされました。

そうこう学ぶ中に、ライブラリアンの存在を知り、将来は人々の知の要求に応える

ライブラリアンになる夢が芽生えました。その頃、大学院で図書館学を開講している大学は国内にはなく、それなら一層のこと本場アメリカで学びたいという夢は願望に変わりました。

当時、個人が外貨を使用することは禁止されていて、留学するには、フルスポンサーを探すか、奨学金を貰わなければ出国できません。いろいろ模索する中に、シラキュース大学にライブラリアン養成の奨学金があることを知り応募したところ、幸いにも受け入れられ、1957年6月、家族と友人に見送られて、小さな貨客船で横浜港を後にしました。

船は、一路、太平洋を北上し日付変更線を越え(その日の夕食は特にご馳走でした)2週間後の早朝、ロスアンジェルス港に着きました。途中、夜一人舳先で、海面に写る月光を目に、耳にするのは船のエンジン音と船縁に打ち寄せる波の音、そんな時、焦土と化した日本から自分の夢に向けて進んでいる私は、「護られている」という感慨と感謝の気持ちが胸一杯に広がりました。

1957年夏から始まった留学生活は、図書館・教室・住まいの3カ所を駆け巡る忙し



さ。級友の多くは、一度、就職して、再び学び続けている人達でした。ラインもスカイプも無い時代、家族との連絡手段は手紙だけ。1ドル360円、電話代は高すぎました。

2年後の1959年9月、修士課程を終了、10月からニューヨークの公共図書館にジュニア・レファレンス・ライブラリアンとして勤務、ヴァレジに住み、秋から春にかけて、ニューヨークの芸術の世界を一シーズン堪能して、再び太平洋を、今度は、東から西へ横切り横浜港に戻りました。食糧難時代の娘は、出迎えに来てくれた母が、一瞬、見間違う程太って大きく成長していました。

21世紀を迎え、銀杏並木もロータリーの樹も正門から間島記念館のコリント様式の柱が見えなくなる程成長し、大学も11学部を有する総合大学に発展しました。英米文学科同窓会も、今秋には21周年を迎えます。半世紀前を回想する時、これからも戦争のない、総てが一層発展・成熟する時代が拓かれることを祈ります。

(青山学院大学名誉教授 '54年卒)

## シェイクスピアから愛の花束を (3)

"Parting is such sweet sorrow,  
/ That I shall say good night till  
it be morrow."

(大意: 別れはこんなにも甘く悲しいの、言いつづけていたいさようならを、朝が来るまでいつまでも。)

悲劇『ロミオとジュリエット』のヒロイン、ジュリエットの言葉。この芝居は敵同士の家生まれた二人が仮面舞踏会で出会い、恋に落ち、「悪しき星のめぐりあわせ」のせいで命を落とすまでの出来事を描いています。典型的

な恋愛悲劇のイメージに反して、卑猥な冗談や悪意ある口論や喜劇的なせりふの応酬が多く意表を突かれます。

そんな中で恋人たちの別れを描く場面は抒情的で強い印象を残します。シェイクスピアは別れの場面を書かせても超一流です。2幕では、舞踏会でジュリエットに心を奪われたロミオが彼女の屋敷の庭に忍び込みます。折からバルコニーに現れたジュリエットと初めて恋を語り合う、いわば愛の二重唱といえる名場面。冒頭のせりふはこのバルコニー・シーンの最後でジュリ

エットが退場する際のものです。"such sweet sorrow"とは、嬉しいのに悲しいという、相反するやるせない恋の想いを表す矛盾語法。"s"の文字で始まる語を連ねていますが、頭の文字を重ねる技法は頭韻といえます。さらに"sorrow"は次行末の"morrow"と脚韻を踏んでいます。こうした繊細な詩を用いて、ひそやかな愛の喜びと切なさが表現されます。人が人である以上、始まった恋には終わりがつきもの。二人が結ばれる3幕での後朝(きぬぎぬ)の別れを経て、終幕における今生の別れの場へと、一気に突き進んでいくのです。

佐久間康夫

比較芸術学科教授  
('82年院修了)